

ずいそう



21 世紀の雪国への期待

和田 惇

「富士山に初冠雪」の知らせに、雪国は急に慌ただしくなる。

今年は21世紀最初の豪雪に見舞われたが、15年ぶりの大雪に準備不足を突かれろうばいした。今度はどんな冬になるのか。不安を胸に、準備にいとまがない。

三八豪雪の年、国道17号湯沢町三国峠を目指し、カンジキで登っていた。未改修の国道は雪で閉ざされているため、人々は半年分の食料と燃料を蓄え、雪の下でひっそり生活していた。それから30年余、一時は1,000万人のスキーヤーを迎え、大きな建物が林立する今の湯沢町をだれが想像しただろうか。

三八豪雪では前会長の加藤三重次北陸地方建設局長と本省機械課から転動したばかりの土屋雷蔵道路計画課長の今は亡きコンビが豪雪という新しい災害に果敢に挑戦した。この豪雪を契機に、本格的な雪への取り組みが始まった。土屋さんは、まず、北陸支部に雪の研究会を設けた。活動は外国文献を翻訳し、輪読することから始まったが、国道17号での人工雪崩や研究会の成果を基に、3年がかりで「防雪工学ハンドブック」を本協会から発刊した。すでに、出版されていた「道路除雪ハンドブック」とともにわが国の雪対策の羅針盤として、20世紀の雪国の挑戦が始まった。

2つのハンドブックの発刊後、土屋さんから「雪問題の奥は深いぞ、この先を勉強してほしい」と言われた。土屋さんの先を読む感覚は鋭かった。雪による災害は自然環境だけではなかった。チェーンを持たないたった1台の車が数日に及ぶ大渋滞を引き起こし、屋根雪を投棄するための交通障害が出るなど、人が災害を引き起こすようになってきた。さらに、粉じんが健康に影響するというので、雪道の走行に便利なスパイクタイヤの使用が禁止された。雪国を守る仕事は住民の理解と協力が進む時代を迎えた。

五六豪雪では国道17号の除雪を担当したが、これまで開発された技術と施設のおかげで、ほとんど交通渋滞は発生しなかった。早朝、首都圏に向かうトラックの列を見て、冬でもジャスト・イン・タイムの輸送体制がとられ、地域間競争に対応できる地域づくりが進行していることに勇気づけられた。

除雪は冬期でも車の円滑な通行を可能にしたが、何より人々の心の中の雪の重さを取り除き、新しい挑戦を促したほか、雪国に向かう人々の心の雪壁を低くする役割を果たした。

この豪雪を克服したころから、雪の冷熱を利用して食品を貯蔵したり、雪を楽しむ催しなど雪国は雪のマイナスをゼロに、さらに、ゼロからプラスする時代へと変わってきたことを実感した。最近では、行政機関やスキー場、旅館が一緒になってスキー客のアクセスを円滑にするための情報を提供するなど地域によるホスピタリティを発揮した活動が始まっている。これは「雪国ITS」が現実のものになったことを物語っている。また、首都圏の大雪に日本道路公団の除雪車が出動し、「雪の消防署」という側面を見せた。

雪国にはまだ多くの課題がある。各種の施設でバリアフリー化が進められているが、雪国では歩道が車道除雪の際の雪置き場になっているため、歩行空間としての機能が果たせない現実がある。雪国の厳しい環境は改善されてきたが、無雪地域と比べたとき、人々はまた格差を感じざることを否めない。

21世紀は「水」の時代といわれている。雪国では豊富で清らかな水が良質な稲やうっそうとした森林を育て、ひいては近海に豊かな漁業資源をもたらしている。わが国は多くの食料を外国からの輸入に頼っているが、農産物の育成に多量の水が使われていることを考えると、われわれは貴重な水資源も一緒に輸入していることになる。今後直面すると思われる食料、環境の分野での課題を解決するうえでも、雪国の資源はわが国の貴重な財産となる。

2つのハンドブックが20世紀の雪国を創造する先駆けの役割を果たしたが、以来築かれたさまざまな対策と挑戦の志はこれらの課題を解決し、21世紀に向けてさらに花開くものと期待している。

来年1月、札幌で開催されるPIARC（国際冬期道路会議）のポスト kongress がこの豪雪地、湯沢町を舞台に行われる。北陸支部長として活躍した土屋さんに雪対策と地域の進展ぶりを報告できることを楽しみにしている。